



既視体験（デジャヴュ体験）の有無判断についての一考察

| | |
|-----|---|
| 著者 | 川部 哲也 |
| 引用 | 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要. 2012, 5, p.21-28 |
| URL | http://doi.org/10.24729/00005290 |

既視体験（デジャヴ体験）の有無判断についての一考察

川部 哲也

I 問題と目的

1. はじめに

既視体験（デジャヴ体験；*déjà vu experience*）とは，“any subjectively inappropriate impression of familiarity of a present experience with an undefined past”と定義される（Neppe, 1983）（足立ら（2001）による和訳は“過去との関連がない出来事に遭遇したときに生じる，すべての主観的で不適切な懐かしさの感情”）。具体的に換言すれば，初めての場面であるにもかかわらず，「まったく同じことが前にもあった」と感じる体験である。これまでに認知科学，精神医学，脳神経学，文学など多様な学問領域により既視体験のメカニズムが考察されてきている（川部，2004）が，筆者は臨床心理学の立場から既視体験の質的側面に着目し，研究を進めている。臨床心理学的観点からはFreud（1901/2007）が，既視体験の分析によって無意識的願望を知ることができるという事例を挙げたように，既視体験が人間の深層意識に通じるものであると考えることができるだろう。

これまでに筆者は調査研究により，既視体験の主観的体験内容を構成するものとして，①離人感を伴う二重意識，②生き生きとしたfamiliarity，③言語化不能な圧倒的強烈さ，④予知できる感じ，⑤運命・縁がある感じ，⑥必然感，の6つがあることを示した（川部，2006）。また，調査結果の考察により，既視体験が根源的な「つながり」や「ずれ」に関する深層意識的事態を開示している可能性があると考えられた（川部，2010）。この考察をもとに，既視体験における離人感を考察した結果，①既視体験における離人感，は，日常的なものではなく，非日常的なものであること。②既視体験における根源的な感覚を言語化したものの一つとして，離人感という表現形態を取りうるということ。③既視体験における離人感に伴う二重意識は，古典的な離人症性のものではなく，解離に近縁の現象（大饗ら（2001）のいう「体験没入型」の離人症に近縁の現象）であるということ。以上の3点が明らかになった（川部，2011）。

このように，既視体験は非日常的意識状態の一つであり，ある根源的な感覚を喚起させるものでありうる。しかしこの重要な心の働きはとても捉えにくいものである。というのは，これらの体験はきわめて主観

的であり，体験を測定するための客観的指標は乏しいからである。客観的指標の発見を目指す研究の一つに脳内の状態と既視体験との関連を研究したものもあるが（例えばAdachi et al., 1999），決定的な指標は得られていないのが現状である。おそらく，既視体験は知覚のみならず，それを認識し解釈する主体的な心の働きがあって初めて成立しうると考えられる（ここでいう「認識する主体」「解釈する主体」の機能は，例えばロールシャッハ・テストにおいて，インクのしみからある物を見出す際の心の働きに近いものであると筆者は考えている）。よって，既視体験について知見を深めるには，この主体的な心の働きについて知る必要がある。本稿では「体験の有無をめぐる問題」を通して，主体的な心の働きについて考察を加えることとする。

2. 既視体験の有無をめぐる問題点

既視体験を体験したことがあるかないかをめぐって，いくつかの問題点がこれまでに指摘されている。

ひとつは，研究者間によって，既視体験の体験率に大きい差があるという問題である。Brown（2004）のレビューによると，57個の調査結果において，体験率は10%から100%までであるという（平均値，中央値はともに67%である）。このように体験率に幅があるのは，質問の仕方や調査における既視体験の位置づけの影響が大きい（例えば，既視体験が何らかの異常な体験と結びつけられた調査だと体験率は下がる）とされている（Brown, 2004）。体験率が影響を受けてしまいやすいということは，既視体験の有無判断は定義や文脈によって大きく左右されるということである。ゆえに，調査を行うにあたっては，その質問の仕方に細心の注意を払う必要があるだろう。

問題点のふたつめは定義を一定にしてもなお解決されないものである。20歳以降，年齢が高い人ほど，既視体験経験者の割合が低下するという奇妙なデータが複数の調査から得られていることがBrown（2004）によって指摘されている。生まれてから今までに一度でも体験しているかという生涯体験率を尋ねているため，理論的には，年齢が上がるごとにこの割合は増加するはずであるのに，減少しているのである。

その理由として，Brown（2004）は，3つの仮説を取り上げて論じている。ひとつは，「記憶の問題」で，

既視体験は、時間が経過するとともに忘れられるものであるという説。ふたつめは、「反応バイアス」で、高齢者は既視体験があると認めたがらない傾向があるのではという説。みつめは、「コホート効果」で、過去数十年の間に、既視体験という概念がひろく普及してきたという説である。

加齢による生涯体験率の減少という問題を論じるにあたっては、本来であれば縦断研究を行うのが適切であろう。しかし、現時点では既視体験について縦断研究を行った例はなく、筆者も縦断研究を開始したばかりであるため、これもまた今後の課題である。現状としては、体験の有無に関わる加齢以外の要因を検討することがまずできることであろう。そのためにさしあたり、既視体験を体験したことがある人とない人とを比較研究することになるだろう。

3. 既視体験が「ない」ということ

既視体験の有無についての主観的判断というテーマに着目した先行研究に加藤（2003）、加藤ら（2006）が挙げられる。そこでは、大学生に対する質問紙調査と面接調査、および家屋画を用いた調査を通して、既視体験の有無についての判断には、「その人のありよう」が見出せることが示された。さらに、既視体験がない人には「平板で切って貼ったような絵」という特徴的な描画が出現していることが示された。これらのことから、既視体験の有無判断には空間構成の違いが関連していること、ひいてはパーソナリティの違いがあることが示唆されている。本研究ではパーソナリティとは異なる角度から既視体験に光を当て、「既視体験がない」と判断する行為そのもの、いわば、既視体験がないと判断した瞬間の意識の様相について検討したいと考えている。その検討を通して、そもそも既視体験が「ある」ということはどういうことか、また「ない」ということはどういうことか、という根本的な地点に立ち戻って検討する必要があると考えられる。

4. 記憶研究との接点

さて既視体験は、その研究の歴史の最初期にKraepelinによって「記憶の捏造の一種である」と位置づけられていた。そして調査においても既視体験を体験した人の中には、既視体験を「記憶のエラー」とみなす人は少なくない（川部、2008）。このように、既視体験と記憶とはきわめて密接な関連があると考えられる。近年の認知科学分野の研究における丹藤（2010）の実験からは、仮に両者に関連があるとしても、単純なものではないことが示唆されている。すなわち、既

視体験の有無によって、虚記憶の出現率（「見たことがないのに、見た」というエラーを起こす確率）に有意な差は見られなかったのである。つまり、既視体験の有無と短期記憶との直接的な関連は見られなかったということである。とすると、短期記憶以外の記憶との関連はどうなっているだろうか。

記憶研究分野で、最近研究が進んできているのが自伝的記憶である。自伝的記憶とは、定義が研究者によって様々である。佐藤（2008）による整理に従うと、①「エピソード」を強調する定義、②「個人史」を強調する定義、③「自己」を強調する定義の3つがあるが、共通点は「これまでの生活で自分が経験した出来事に関する記憶」（佐藤、2008）であるといえるだろう。例えば、「小学3年生の時、徒競争で一等賞を取った」というものが自伝的記憶である。

また佐藤（2010）は、自伝的記憶は加齢に従って安定する傾向があることを示している。すなわち、加齢するほど、同じことを想起する傾向があるというのである。これは加齢によって記憶システムが安定化・固定化していくことの証拠であると考えられる。

その知見を、既視体験に当てはめて考えてみると、既視体験の記憶が時間の経過とともに変容していつているということは、十分にありうると考えられる。つまり、自伝的記憶が安定化・固定化していく過程において、「既視体験の記憶だったもの」が「既視体験の記憶」として想起されなくなる可能性があるということである。これにはいくつかのパターンがありうるだろう。一つは、自伝的記憶が安定化・固定化する過程において既視体験のような曖昧な体験の記憶は排除される（その体験自体がなかったことになる）という可能性。もう一つは、その過程において既視体験の記憶が安定したものに再構成される（その体験自体はあったのだが、既視体験ではなかったことになる）という可能性。微妙な違いであるが、この違いは決定的である。前者は単なる忘却で済まされるが、後者は忘却ではなく、記憶の変容が生じていることになるからである。

体験記憶の忘却や、記憶の変容を考慮するならば、既視体験の有無を問題にする際には、もはや単に体験が「あった」か「なかった」ということではなく、そこには既視体験が「あった」と判断する主体が大きく関わっていると考えられる。本研究は、その主体のありようを捉える試みの一つである。

では、そもそも既視体験を「あった」、あるいは「なかった」ということは、どういうことだろうか。それを判断する根拠は何だろうか。そして、その判断は変

わることがありうるのか。本稿はそのような問題意識からスタートするものである。

II 方法

【予備調査】

予備調査は、質問紙調査と面接調査の二つから成る。まず、本学大学院生15名（男性3名、女性12名、平均年齢25.1歳、SD2.1）に質問紙調査を行った。そのうち「既視体験を体験したことが全くない」と回答したのは3名（20%）であった。その3名のうち全員が面接調査協力で同意したため、3名全員に対し、それぞれ個別に面接調査を行った。調査場所は、本学内の研究室であった。面接調査によってわかったことは、質問紙調査において「既視体験の体験例」が記載されていたことにより、自分の体験がその例に似ていないと感じた場合や、既視体験を経験した感覚は保持しているものの、その体験を言語化できない場合に、「体験したことが全くない」と回答してしまったということであった。よって、本調査の質問紙調査用紙からは、「体験例」を削除し、単に既視体験の簡略な定義（初めての場面なのに「これとまったく同じことが前にもあった」と思う体験）のみを記載する形にした。もともとこの「体験例」は、これまでの調査では既視体験を知らない人が多かったので、自身の体験を想起しやすくするために1999年の調査から記載して使用してきたのであるが、今はほとんどの人が既視体験の概念を知っていること、そして、体験例が載っているために、かえって自身の体験を回答しにくくなっていることが考えられたため今回変更することとした。

【本調査】

本調査も、質問紙調査と面接調査の二つから成る。まず、心理学関連の講義の授業後に講義室にて質問紙調査を実施した。質問紙調査は「記憶と体験に関する心理学調査」として実施され、①ブルースト現象の経験有無と頻度の質問、②既視体験の経験有無と頻度の質問、③離人感尺度（松下、2000）から構成され、最後に面接調査の依頼を行い、承諾した人に連絡先を記入してもらった。なお、質問紙の最初のページには同意書が付けられており、調査内容に同意した人のみ、質問紙調査に参加してもらった。調査協力者は本学大学生176名（男性64名、女性111名、性別無記入1名、平均年齢19.3歳、SD2.7）であった。「既視体験を体験したことが全くない」と回答したのは19名（10.8%）であった。その19名のうち面接調査協力で同意し、かつ調査可能な日時の都合が合った調査協力者は4名であった。その4名に対し、それぞれ個別に面接調査を

行った。調査場所は、本学内の研究室であった。面接内容は調査協力者の許可のもと、ICレコーダーによって記録された。

面接調査は、半構造化面接により実施した。そこでは「あなたが、デジャヴ体験（既視体験）を『まったくくない』と回答するまでに、考えたこと・思ったことを教えてください」と尋ね、インタビューを開始した。この質問は、「私は、既視体験をまったく体験したことがない」と判断基準および判断したプロセス、その時の意識のあり方について聞くことを目的としたものである。

なお、予備調査および本調査の実施にあたっては、大阪府立大学人間社会学部研究倫理審査委員会の承認を得た。

III 結果と考察

1. 既視体験「なし」の判断基準について

まず、本調査の4名の語りから、既視体験を体験したことがないと判断するに至ったプロセスを考えてみたい。ゴシック体で示したところは、調査協力者が語った内容を示し、< >で示したところは、調査者（筆者）が語った内容である。（ ）で示したところは、発話の文脈から筆者が補った内容である。

(1) Aさんの語り

この体験、夢で見たことがあるという体験はあったんですけど、夢で見たことがあるというのは、違うかなと思って。（中略）デジャヴって、夢で見たかすらわからないんじゃないかな。例えば、本当に夢で見たという実感がなかったりとか、もしくは、なんとなく見たことがある、小さい頃にもしかしたら見たかもしれないとか、夢と断定できない。そういうものかなと思って。私の場合は、これ夢で見たことがあるという、拠り所というか、寄りかかるとあるもので、デジャヴではないと思いました。

Aさんの語りから、まず「既視体験を体験したことはあるか」と自分に問うた時に、まず「夢で見たことが実際に起こった」という体験を思い出した。しかし、その体験における「見たことがある」感覚は、夢の中でそれを見たという記憶に支えられている（Aさんの言う「拠り所」がある）ため、その体験を既視体験であるとは思わなかった。Aさんにとって既視体験とは、夢で見たかどうかさえわからないような体験、いわば「拠り所」の不確かな体験であると捉えられてい

た。ゆえに、自分のその体験は既視体験ではなかったのだ、という判断に至ったと考えられる。

(2) Bさんの語り

デジャヴ体験という感覚がまずわからなくて。(中略)(友人に)なんか予知夢みたとか、靈感とか強い子とかおって。(中略)(自分は)そんな体験したことがなかったので。

Bさんは、友人から既視体験について話を聞く機会があった。そしてその話は、夢で見たことが実際に起こった予知夢の体験談であった(その体験はまた、靈感に基づく未来予知の話であった)。そこからBさんは、自分にはそのような「すごい体験はない」と思って、既視体験はなかったと判断したと考えられる。

(3) Cさんの語り

(既視体験というのは)夢で体験したことを現実の世界で見たりとか、この風景を覚えているっていうことがあると思っていました。でも、私、すごく夢見るんですけど、私の夢は、夢で見て、現実世界で体験するっていうよりも、自分が現実体験したこととか、それをいろんなバリエーションに変えて夢で見るということが多いので。(中略)自分の夢を思い返したんですけど、やっぱり、どこかに行って、この風景見たことがあるとか、そういうことはなかったなと思ったので。

CさんもBさんと同様に、既視体験というのは、夢で見たことが実際に現実で起こるという体験を指すと考えていた。そして、夢をととてもよく見るCさんは自分の夢内容について検討を加えた。その結果、自分の夢は現実を先取りするものではなくて、自分の過去の体験内容を「いろんなバリエーションに変えて夢で見る」ものであると考え、既視体験はまったくないと判断したのであった。また、Cさんは続けて、このようにも語った。

これは私にとっては初めての場面なのに(見たことがある)っていうことは、夢の世界ではあると思うんですよ。<夢の中ではデジャヴがある>ある。しかも、場面じゃなくて、同じ体験を前もしたみたいな。

そしてCさんは夢の内容を語った。それは非常にインパクトがあり、身体感覚を伴った鮮やかな夢内容で

あった。しかもその夢は何回も現れたものであると語る。厳密には、これは夢の中の既視体験ではなく、同じ夢が何度も繰り返し現れるという「反復夢」である。Cさんにとって、夢はとでもリアリティのあるものである。夢で見たことが実際に起こったら、気が付くと思うかと調査者が問うと、Cさんは肯定した。この考えにより、「既視体験がない」という判断はより補強されていると考えられる。

(4) Dさんの語り

過去の体験とかを想起していったって、デジャヴ体験って、したら絶対に印象に残っていると思うので、想起できるはずだと思うんですね。それで、浮かんでこなかったんで、体験したことがないんじゃないかなって思いました。

Dさんのこの語りには、既視体験をないと判断するための簡潔にして重要な判断基準が示されていると考えられる。すなわち、①既視体験をもしても自分が体験していたら、きっと印象に残っているはずである、そして、②印象深い記憶は、きっと想起できるはずであるという考えである。よって、想起できるような体験がなかったので、「既視体験なし」と判断したのである。

4名のこれらの語りから、まず注目されるのは、既視体験と夢の関連が語られることが多い(4名中3名)ということである。理論的にも既視体験と夢の関連は多く指摘されており、川部(2008)の面接調査においても比較的語られることが多かった。ゆえに、これは「既視体験あり」と「既視体験なし」との共通点といえる。ただし、その現れ方については注意が必要だろう。この点については、川部(2008)のデータを再分析しつつ後の節にて考察することにする。

次に注目すべきは、4名中2名に「既視体験は、印象に残っているはずである」という考えが見られたことである。実際は既視体験には曖昧なものも多くあるのでどちらかという記憶に残りにくい体験も多いのであるが、この2名は「きっと印象的である」というイメージを持っていた。それはどうしてだろうか。

一つの仮説であるが、彼らは既視体験にとっても神秘的なイメージを抱いている可能性がある。例えばBさんは、既視体験を、靈感が強い人の予知夢体験と並ぶ体験として位置づけていた。古来、既視体験は前世の記憶として捉えられてきたし、超心理学(これまで知られている科学法則では説明不能な超常現象を、科学

的に説明し、実験的に研究しようとする心理学)の研究対象にもなっていた(川部,2004)。そしてChari(1964)は、科学的に説明のつかない既視体験が存在することをほのめかしている。このような「説明できなさ」が既視体験にはあるため、神秘的な体験として受け取ることも自然なことであろう。このように既視体験に神秘的イメージを抱いている場合は、「自分には神秘体験がない」と思うことの延長線上に「自分には既視体験がない」という判断があるのかもしれない。

その判断を支えるものとして、「印象的なものは必ず想起できる」という考えがある。いわば、自分の記憶を非常に信頼している様子がかがえた。既視体験があるという人からは、ほとんど聞かれない考え方なので、このような語りは既視体験がないという人に非常に特徴的なものであると考えられる。既視体験「あり」と「なし」の間には、自身の自伝的記憶への確信度に差がある可能性がある。

2. 判断基準の揺らぎについて

4名の語りにおいて、3名は「既視体験をまったく体験したことがない」という自分の判断が揺らぐことはなかったが、1名(Aさん)は判断に揺らぎが見られた。その様子を具体的な語りから見ていくこととする。

Aさんは、既視体験に似た体験を想起したが、夢という切り所があるので、それは既視体験ではないと語った。その後、Aさんは「前にもあった」というのではなく、「前に夢で見た」という体験なのだと説明をする。

＜普段から夢を思い出すほう？＞私、ほとんど夢は思い出さないし、あまり見ていないと思ってらんです。意識して思い出そうとします。朝、起きた時に。＜何かつけている？＞つけている時もあります。(中略)＜書き留めている夢で、そういうこと(既視体験)が起こったというパターンはある？＞書き留めている夢で、そういうことが起こったことは…ないです。(中略。体験の詳細について語ってもらう)しゃべっていて、本当に夢を切り所にしているのかなってというのは、自分の中でちょっと揺らいできたんですけど。＜ぐらぐらする＞はい。確かに、書き留めた(夢)中には含まれていないなあ。

そして調査の最後にAさんが語ったのは、以下の言葉である。

もしかしたら、私の中で、よくわからない体験を、夢と結びつけて安定を保つというところが、あるのかなと思いました。でも、自分の意識の中では、これ夢だ、と思ってるんです(笑)。

この語りを聴いて、筆者ははっとした。この語りには、既視体験がないという判断が揺らぐ時に何が起こっているのかが現れていると感じたからである。最初Aさんは、自分の体験は夢という確かな「切り所」があるから、既視体験ではないと判断していた。しかし、だんだんとその夢を本当に見ていたかという点に確信が持たなくなってきた。そして最後には、よくわからない体験を理解の範疇に収めるために、体験を夢と結びつけた可能性を語った。つまり、既視体験がなかったという判断が揺らぐのは、「夢を見た」という自伝的記憶が事実であるかどうかの確信が持たなくなったときであるといえよう。この時こそ、既視体験が「なかった」から「あったかもしれない」に転ずる契機であると考えられる。Aさんにとって、この「不確かな過去」を容認するかどうか、既視体験の有無判断の根拠となる基盤を形成していたといえよう。

逆の言い方をすると、記憶の不確かさに開かれていくにつれ、「既視体験を体験したことがない」とは言いきれなくなってくると考えられる。その意味で、「既視体験がない」と宣言できることは、自伝的記憶を揺らぎなく確信しており、「不確かな過去」は認めないという姿勢の現れであるとも考えられる。

もちろん、これは今回の調査結果から初めて得られた考えであり、仮説の域を出ない。自伝的記憶の確信度がどうか、記憶の不確かさを容認しているかどうかという観点が、既視体験研究に有用であるか否かは、今後の精査が必要である。

3. 既視体験と夢の関係について

Aさんの語りから、既視体験という「よくわからないもの」を夢と結びつけることで語り手の心の安定が得られる可能性が示唆された。つまり、夢と結びつけることによって、既視体験は「よくわからないもの」ではなくなる、つまり「少しわかるもの」になるといえよう。

ここで筆者が連想するのは、川部(2008)における既視体験についての面接調査においても、既視体験と夢を結びつける語りがいくつかあったことである。改めて数えてみると、当時調査した全26例のうち、夢と何らかの関連があるという発言が認められたのは13例(50%)であった。うち、5例(19.2%)は既視体験を

予知夢体験として語っていた。予知夢体験として既視体験を語る、その語り口には特徴があった。まず予知夢体験として語られた既視体験の例を2つ挙げたい。なお、その2例は川部（2010）に挙げたものの再掲であるが、今回は少し詳しく記載した。

Eさんの体験（抜粋）：（中学時、学校での体験）
ある時夢の中で試験を私は受けていた。漢字の書き取り問題で（「厚い」という漢字の）線が一本あったかなかったか悩んでいる夢で、ああーどうしよう！？というところで目が覚めた。それからすぐに辞書で調べれば良かったが、その時はそのままにしておいた。その夢を見たことは忘れていて、何ヶ月か後に、定期試験があり、問題を解いているうちに「見たことあるかも」と思っていると、本当に「厚い」という字の問題が出てきた。しかも悔しいことに夢と同じようにどっちだったか悩んでいるのだった。

Fさんの体験（抜粋）：（2ヶ月前、通学中の体験）
その日の朝、夢で、“警察がスピード違反の取り締まりをしていて、私がそれに引っかかる”という場面を見た。私が夢で見たスピード測定器は、いつもなら絶対のない場所に置かれていた。さらに、夢での設定は学校に行こうとしている所だった。私は朝起きて、その夢のことは深く考えず、いつも通り駅までバイクに乗り、出かけた。そして、夢に出てきた場所を通過すると、なんとそこにはスピード測定器があった。夢で見た光景だった。夢のとおりになってしまった。夢の言っていることを聞かなかった自分が悪かったと反省した。

これらの2つの既視体験語りにおいては、既視体験をまず語るのではなく、それ以前の、夢を見たところから語り始めるところがきわめて特徴的である。過去の夢をまず語り、その後既視体験を語るという時系列に沿ったこの語りからは、Eさん、Fさんが過去から現在へ、そして、現在から未来へと流れる時間、いわば「過去・現在・未来」という区分の下、整然と位置づけられた直線的な時間を生きているように感じられた。時系列の乱れが無い語りは、聞いていて理解しやすいものである。そして、おそらく体験者自身にとっても、この体験は安定した、確かな自伝的記憶として位置づけられていると考えられる。

一方で、EさんとFさんは二人とも、夢を見たのに

それに注意を払わなかったことを後悔・反省しているという点もまた特徴的である。これはいわば、直線的な時間モデルによって得られた心の安定の代償ともいえよう。つまり、「現在のこの出来事は、過去のあの夢を見たから起こった」という考えは、現在の体験に根拠を与えるため、体験者はとても慰められ、安定するであろう。しかし一方で、その考えは「あの夢を見たから、現在のこの出来事が起こってしまったのだ」という因果関係に縛られたものであり、過去を悔やむ心の動きに巻き込まれやすい。つまり、この語りの形式においては、現在が過去に規定されており、体験者の軸足は現在よりも過去に重心が置かれている。この時間意識は、取り返しのつかない過去を悔やむ点において、あとのまつり的な意識であるといえ、木村敏（1982）のいう「ポスト・フェストゥム」の時間意識に近いと考えられる。

これと対照的なのが、13例中8例に見られる既視体験と夢との関係を示す語りである。これらの語りは、既視体験を語り終えた後、「この場面は前に夢で見たことがあるのかもしれない」という発言が出てくる。つまり、語りの順序が予知夢体験では「夢」「既視体験」であることが多く、その他では「既視体験」「夢」という順序になることが多いのである。

本調査で筆者が感じたことは、判断基準の揺らぎが見られなかった3名は、いずれも時系列に沿った語りだったため、筆者は聞いていて理解しやすかったということである。それらの語りは、以前の調査で予知夢体験として既視体験を語った人の語りを聴いた時の感触とどこか似ていると感じられた。両者に共通しているのは、軸足が過去に置かれており、その過去は「確かなもの」として捉えられていることである。よって、既視体験がないという人と、予知夢体験として既視体験を語る人は、時間意識が似ているという点で共通していると考えられる。

4. 自伝的記憶が安定しているということの両義性

本稿の最後に、本研究と臨床との接点について述べておきたい。本研究における検討により、既視体験がない人や予知夢体験として既視体験を語る人は、自伝的記憶が安定している可能性が示された。彼らの語りは時系列に沿っており、わかりやすい。ゆえに、現在の自己イメージは安定したものであるといえるだろう。一方で、現在の自己イメージは常に過去の自己イメージによって規定されているため、容易に変更することはかなわない。佐藤（2010）が論じた自伝的記憶が加齢に伴って安定するという現象は、パーソナリ

ティの安定を保証すると同時に、ともするとパーソナリティの固定化・硬直化を招くということを意味すると考えられる。臨床的に見ると、自伝的記憶が安定している人は、心の危機に対して動揺しにくい面を持つと同時に、人格の変容に対しては閉じられていると考えられる。

その対極にあるのが、自伝的記憶が不安定な人である。自伝的記憶がないわけではないが、その記憶に確信が持てなかったり、記憶そのものが曖昧だったりする人である。彼らの自己イメージは、確たる過去に支えられていないため、不安定であるかもしれない。しかしそれはまた、「不確かな過去」を容認している態度であるともいえる。既視体験は、体験の性質上、「不確かな過去」に立脚した体験である（既視体験の多くは「前にもあったような気がする。しかし、それがいつだったかはわからない」という体験様式になっている。この様式は「不確かな過去」を容認していないと成立しない）。つまり、「不確かな過去」を容認していることが、既視体験があるという判断の基盤になっていると考えられる。

記憶が不確かであることや、「不確かな過去」という中途半端なものを容認してしまう態度は、健康度が低いと見られるかもしれない。しかし、記憶というものは、目撃者証言の研究成果を引き合いに出すまでもなく、本来的に不確かなものであるという一面がある。その意味で、彼らの態度は必ずしもマイナスであるとはいえないであろう。臨床的に見るとむしろ、「不確かなもの」に開かれていることは、彼ら自身の固定観念が揺らぐ瞬間に立ち会う機会があるともいえるし、新しい自己イメージへと変容する可能性も示していると考えられる。そこに心理療法の一つの契機があるといえるだろう。誤解のないよう付言しておくが、筆者は自伝的記憶が安定している人に対して心理療法が無効であるという主張をしているのではない。その安定がその人の生き方を支えている限りは、心理療法においてもその安定を尊重せねばならないだろう。しかし、その安定が硬直化し、生き方に無理が生じている場合は、心理療法において、あえてその安定を崩さねばならないこともあるだろう。このように、現時点では考察がとて粗削りであるが、今後も既視体験研究を通して心理療法についての視点を見出していきたい。

IV 結論

本研究において、既視体験の有無判断を通して、既視体験が「ある」ということ、および既視体験が「ない」と

いうことの背後にある意識の様相を探索した。既視体験が「ない」と判断した4名への面接調査から得られた結果は、以下の4つが挙げられる。①既視体験がないと判断する背景に、自伝的記憶への確信度の高さがあって考えられた。②既視体験がないと判断する背景に、既視体験を神秘体験と位置づけている可能性が示唆された。③既視体験の有無判断が揺らぐときの一例として、自伝的記憶への確信が揺らいだ時が挙げられた。④既視体験がない人および既視体験を予知夢体験として語る人は、過去に重心を置くという時間意識のあり方を行っている可能性が示唆された。なお、今回の調査対象は4名と少ないため、これらの結果の信頼性については今後の精査が必要であると考えられた。

付記

本研究は、2011年9月に日本心理臨床学会第30回大会にて発表した内容を加筆修正したものです。当日司会の労を執っていただいた田畑治先生に感謝いたします。また、インタビュー内容の掲載を承諾くださった調査協力者の皆さんに感謝いたします。また本研究は、科研費（課題番号23730660）の助成を受けました。

文献

- 足立直人・足立卓也・木村通宏・赤沼のぞみ・加藤昌明（2001）：既視感（*déjà vu*）体験評価尺度日本語版の作成とその妥当性の検討。精神医学，43（11），1223-1231。
- Adachi, N., Koutroumanidis, M., Elwes, R.D.C., Polkey, C.E., Binnie, C.D., Reynolds, E.H., Barrington, S.F., Maisey, M.N., Panayiotopoulos, C.P. (1999) : Interictal 18FDG PET findings in temporal lobe epilepsy with *déjà vu*. *The Journal of Neuropsychiatry and Clinical Neurosciences*, 11, 380-386.
- Brown, A.S. (2004) : *The déjà vu experience*. New York, Psychology Press.
- Chari, C.T.K. (1964) : On some types of *déjà vu*. *Journal of the American Society for Psychical Research*, 58, 186-203.
- Freud, S. (1901) : Zur Psychopathologie des Alltagslebens. 高田珠樹（訳）（2007）：日常生活の精神病理学にむけて。フロイト全集7。岩波書店。
- 加藤奈奈子（2003）：デジャヴ体験と自己との関係—一家屋画を通した一研究。京都大学教育学部卒業論文（未公開）
- 加藤奈奈子・川部哲也（2006）：デジャヴ体験（既視体験）とその主観性に関する研究。日本心理臨

- 床学会第25回大会発表論文集, 406.
- 川部哲也 (2004) : 既視体験研究の歴史. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 50, 399-412.
- 川部哲也 (2006) : 既視体験における主観的体験内容についての一考察. 心理臨床学研究, 24, 99-109.
- 川部哲也 (2008) : 既視体験に関する心理臨床学的研究. 京都大学博士学位論文 (未公刊).
- 川部哲也 (2010) : 日常場面における既視体験の特徴—初場面既視体験との比較検討—. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, 3, 17-24.
- 川部哲也 (2011) : 既視体験における離人感の特徴. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, 4, 59-66.
- 木村敏 (1982) : 時間と自己. 中公新書.
- Nepe, V.M. (1983) : *The Psychology of Déjà vu: Have I Been Here Before?* Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- 大饗広之・阿比留烈・土門祐二 (2001) : 二つの離人症—記述現象学的立場からの再考—. 精神神経学雑誌, 103, 411-425.
- 佐藤浩一 (2008) : 自伝的記憶の構造と機能. 風間書房.
- 佐藤浩一 (2010) : 自伝的記憶の安定性—意味記憶との比較 (1). 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 59, 205-217.
- 丹藤克也 (2010) : 既視感体験の頻度と記憶エラー. 日本心理学会第74回大会発表論文集, 801.